

平成30年度第2回鳥取県総合教育会議 議事録

1 日時

平成30年9月10日（月） 午後3時から午後5時まで

2 場所

鳥取県庁 議会棟3階 特別会議室

3 出席者

知事 平井伸治
教育長 山本仁志
教育長職務代行者 中島諒人
教育委員 若原道昭
教育委員 坂本トヨ子
教育委員 佐伯啓子
教育委員 鱸 俊朗
教育委員会事務局 理事監兼博物館長 田中規靖
教育委員会事務局 教育次長 足羽英樹
有識者委員 大羽沢子
有識者委員 上萬貴志
有識者委員 津島 望
有識者委員 長曾加奈子
有識者委員 横井司朗
事務局 元気づくり総本部長 加藤礼二

4 あいさつ

(加藤部長)

・第2回鳥取県総合教育会議を開催する。開会に当たり、平井知事から挨拶を申し上げる。

(平井知事)

- ・秋の長雨が降り続き、足元の悪い中お集まりいただき、感謝申し上げます。
- ・この会議は、子ども達の未来を創るため、いろいろな考え方を教育行政の中に入れていくなど、その時々課題に向き合う場であり、臆することなく様々なご意見をいただければ大変有難い。
- ・いま、大学入試制度や英語教育など教育全体が変り始めている中、私達も様々な独自の教育メソッドを開発しつつあるが、それらの方向性を検証しながら忌憚のないご意見をいただき、そうしたご意見を機動力として取組を進めていきたい。
- ・先日公表された全国学力・学習状況調査の結果については、一喜一憂するものではないが、これまでの長いトレンド・傾向として、鳥取県の子ども達が持っていた学力が全国の中で沈み始めている点が心配である。
- ・朝読書の取組により、これまで、特に国語Aなどは際立った点数を示し、全国上位を争っていたが、今回は全国平均と同程度となっているほか、中学生の国語Bでは、むしろ課題が生じている状況にある。また、もともと国語と比べて若干課題のあった算数・数学についても、全国平均を下回る状況が出てきている。
- ・実はこの会議においても、いろいろな議論をさせていただき、教材開発など教えるメソッドを創っていかうとか、更にはスーパーティーチャー・エキスパートティーチャーというものを創り上げていかう等、いろいろと挑戦をしてきたが、現場の先生方とかみ合っていないのかもしれない。
- ・この際、学力向上というものを、もう一度新規まき直してチャレンジをしていかなければならないのではないかと思う。

- ・また、子ども達が成長して大学、県外へ出て行ったきり帰ってこないといった状況もあって、ふるさと鳥取県の素晴らしさ、その魅力、働く場所などを、しっかりと子ども達にも体感してもらうようなふるさと教育が必要ではないかといったことが言われている。
- ・併せて、美術館など喫緊の課題がいろいろある中、忌憚のないご意見をどんどんお寄せいただき、この鳥取県の子ども達が自らの力で未来を切り開いていけるよう、そういうふるさとに発展するようにお力をいただきたい。
- ・大坂なおみ選手が日本人としては初めて、グランドスラムで優勝を飾った。彼女のキャラクターに加え、非常に素直で真っ直ぐなところが、世界中の共感を呼び起こしているように思う。
- ・その大坂なおみ選手が急に強くなってきた理由として、サーシャ・バイン氏がコーチとして入って指導を始めたことで、彼女の素質に火が点いたと言われる。
- ・これまで、完璧主義で100点満点を出さなければいけないといったプレッシャーがあり、その100点が99点になった際、自責の念により、結局、試合を自分で壊してしまうということがあったが、サーシャ氏が非常にポジティブに接し、楽しみながらテニスをするということを丹念にやってきた成果として、気持ちで後れを取ることなく、しっかりと勝利に結びつけることができ、憧れの選手も倒した上で優勝することができたと言われている。
- ・やはり、子ども達に本来備わっている伸びる能力を萎縮させることがあると、その分がマイナスになるのではないかと思う。もう一度私達も大坂なおみ選手のような、そういう偉大な人間をふるさとから輩出できるよう、しっかりと教育の改革を遂げていければと思う。
- ・皆様からお知恵をいただくよう重ねてお願い申し上げ、私からの冒頭の挨拶に代えさせていただきます。

(加藤部長)

- ・続いて、山本教育長にご挨拶をお願いします。

(山本教育長)

- ・日頃、横井委員はじめ、有識者委員の皆様方には、本当にお力添えを賜っていること、改めて感謝を申し上げます。
- ・今年度に入ってから災害が非常に多く、地震でブロック塀が倒れたり、あるいは猛暑の中で熱中症の対策など、学校現場でも危機管理へ気を使うことが多いが、安全で安心して学べる環境づくりについても、我々行政として取り組んで参りたい。
- ・先ほど知事から話があった全国学力・学習状況調査の結果は、平均正答率だけではなく、いろいろな項目により、いまの教育の状況を表わす一つの指標ではないかと思う。
- ・そういった意味で、我々の日頃行っていること、行ってきたことを総合的に振り返り、うまくいっているのか、うまくいっていないのかといった自己評価も含め、あるいは外からの評価もいただきながら、それを是正していく、より良い方向に向けていくことが求められている。
- ・そうした観点から見ると、先ほど知事からもあったが、これまで平均点よりはずっと良かったものが段々と右下がりとなり、今や平均あるいは平均を下回る教科が出てきている点については、他県がいろんな取組を行うことで、結果、平均に寄ってきているといったこともあるのかも知れないが、私どもとしても、いま一度この学力向上についてしっかりと振り返り、抜本的に考えてみる必要があると思っている。
- ・また、「将来の夢を持っているか」といった辺りは、やはり過去からずっと低い状況のままで、「算数・数学が好きですか」、「内容はよくわかりますか」なども含め、学びに向かうモチベーション、あるいは意欲といった面でも少し気になるデータが出ている。
- ・ふるさと教育に関連して申し上げれば、地域や社会についての関心が低い状況にあり、地域の行事に参加する率は全国的に見てもトップクラスである一方、その地域や社会への関心や地域を良くするといった意識が低い状況があり、こういった点をふるさと教育といった形で向上を図っていけないかと考えている。
- ・県立美術館の近況報告を含め、皆様方から忌憚のないご意見がいただくようお願い申し上げ、冒頭の挨拶とさせていただきます。

(加藤部長)

- ・それでは意見交換に入る。事前に配布した資料について、順次、簡単に説明させていただく。まず、平成30年度全国学力・学習状況調査結果とその対策及びふるさと教育の推進について、足羽教育次長に説明をお願いします。

(足羽教育次長)

- ・資料の1には、先ほど来、知事そして教育長から話があったが、今年度の全国学力・学習状況調査における国語、算数・数学及び理科の状況を掲載している。
- ・1頁の(2)各教科の特徴という点では、小学校及び中学校の国語において、B問題に属する読解力、表現力に課題が見られるという結果が得られた。算数・数学については、小学校においてはA問題B問題ともに、つまり基礎基本となる知識・技能に加えて、その活用といった点でもやはり全国的な比較で見れば課題が見られ、中学校においては、思考力・表現力といった辺りが課題ということが見えてきた。理科においても、やはり思考力という点で課題があることが浮かんでおり、この結果は謙虚に受けとめる必要があると思っている。
- ・(3)では、家庭を含めた生活習慣がきちんとしている児童生徒は平均正答率が高いという傾向が表れており、裏を返せば、学校現場はもちろん家庭も含め、学習環境の整備をいかに進めていくかということが必要ではないかと思う。
- ・(4)は地域別・市町村別の状況で、地域別には大きな差異は見られないが、更に市町村別に見ていくと15ポイント以上開きのあるところも出てきており、この辺りについて市町村に現実をしっかりと伝えながら、その改善を図っていくことが必要である。
- ・3頁には全国学力・学習状況調査結果の棒グラフを載せている。全国と鳥取県の数値の差が、スタートした頃と比較すると、いずれも段々と下降傾向にあることが読み取れると思う。
- ・こうした状況を受けながら、これまで少人数学級やエキスパート教員、授業力向上に向けた取組等を進め、ある一定の成果は現われたものの、2頁(2)に継続的な課題を整理している。
- ・課題①だが、やはり抜本的な授業力向上、あるいはそうした学力不足の結果が出ていることをしっかり受け止めて抜本的な対策を検討していく必要がある。その意味では資料5頁に示しているように、全体的な今後の鳥取県の学力向上に向けた取組を足元から見つめ直して検討する「学力向上推進プロジェクトチーム」を発足させ、現状分析はもちろん、戦略的に、あるいは短期、中長期的な視点から対策を講じていきたいと考えている。
- ・プロジェクトチームのメンバーについては、県内の校長あるいは教育長のみならず、本県の教育施策に精通されている兵庫教育大の浅野先生、あるいは国立教育政策研究所の千々布先生など、秋田や福井県などの好事例をたくさんご存じの方々にアドバイザーとして入っていただきながら、鳥取県に足りないところ、あるいは取組の工夫というようなご意見をいただきたいと思っている。
- ・3番には、具体的な検討内容を4つ挙げているが、ポイントとしては、これまでの取組が管理職を含め現場の教員の意識にどれだけ届ききっているのか、その辺りを根底に据えながら、どのような施策を送り込んでいくかといった4つの柱をポイントにしたいと思っている。
- ・また、そのベースになるものは、特に小学校・中学校で言えば、私どもは「学級づくり」だと思っており、学級経営をしっかりとやる中で、学ぶということに対する意識や雰囲気をつくっていく。先ほど申した家庭ということも抱え込みながら、その辺りをしっかりとベースにした検討を進めて参りたい。
- ・資料を戻っていただき2頁について、このプロジェクトをベースにしながら、本年度から進めている地域別地域課題の効果検証をしながら全県展開を図っていく。あるいは課題となっている算数・数学といった部分について、資料の中に、「算数・数学の授業づくり」という、これまでの経過を課題分析して、どういうふうに授業展開すべきかという物差しを新たにつくった。これを単に渡すだけではなく、先ほど言ったが、具体的な授業をいかに構築していくのか、その辺りの指導ポイントの徹底を図って参りたい。
- ・3つ目の課題は、「ふるさと」ということと関連しており、次の「ふるさと教育の推進」のところと合わせて説明をさせていただく。こうした原点に立ち返るとともに、アドバイザーから意見をいただきながら、学力向上策を検討、推進して参りたい。
- ・続いては資料2「ふるさと教育の推進について」をご覧ください。グローバル化がどんどん進行する中で、やはり自分がどこで、誰と、どんなことをしていくのか。よく使われる「キャリア教育」という言葉もあるが、子ども達自身が、自分自身のアイデンティティーをしっかりと持ちながら、ふるさと鳥取に誇りと愛着が持てる、そうした人材の育成が本当に大切になってきている。
- ・学校現場の実施状況について、次項以降に掲載している。各市町村が、それぞれの地域の状況に応じた、あるいは地域にちなんだふるさと教育を推進している一方で、人口流出がなかなか

減らないといった中、もう一度ふるさと教育の現状をしっかりと整理し、体系化を図っていくという観点で、4対応策（案）にあるように、鳥取県版の児童生徒用ふるさと教育の副読本を活用した取組、講演会等含めたさらに鳥取ということをしかりと認識してもらい、そういう取組を推進していくことで、先ほどの学力向上策と絡めていきたいと考えている。

(加藤部長)

- ・続いて、次期『鳥取県の「教育に関する大綱」』の方向性について、説明をお願いします。

(林課長)

- ・現在の教育に関する大綱は、平成30年度までを期限として定め、毎年度改訂をしてきたが、次期大綱は、大綱全体を改めて31年度以降のものに改訂するもので、それに対してご意見をいただきたい。
- ・資料には、事務局として考えている大綱の改訂の方向性を示している。一編の中期的な取組方針、二編の毎年度の施策や数値目標など、いま現在の構成と同じような枠組みで考えていきたい。
- ・県の教育振興基本計画が来年度からの5ヶ年分について、現在改訂作業が進められているので、その内容も踏まえたものにするとともに、本県の教育の現状なり、社会情勢の変化に合わせた課題に対応できるよう取組の方向性を検討できればと考えている。
- ・対象期間としては平成31年度からの4年間を想定しており、現段階で大きな柱として考えているものは、やはり学力向上がまず1番。2番目として、ふるさと鳥取をきちんと学び、鳥取を支える人材を育ていくという視点を新たに挙げたい。3番目は、時代や社会の変化に対応していくとして、昨今の防災なり、安全管理という部分も踏まえ、ソフト面・ハード面においてそれぞれの教育環境を今以上に充実していかなければいけないという考え方により、少し柱を変えたい。
- ・裏面には主な取組例として、少しキーワード的なものを記載している。学力の部分については、先ほどあったように、プロジェクトチームで検討した内容を実現していくこと、学習指導要領の見直しに伴う英語教育、大学入試やプログラミング教育への対応などを考えている。
- ・ふるさと教育の推進についても、先ほどあったように、子ども達に地域を知ってもらい、地域を支えてもらうため、ふるさと教育やキャリア教育等の充実などを柱にしたいと考えている。
- ・3番目の部分については、少子化や時代の変化に対応するといった観点で、ソフト的な面では、県立高校の在り方の検討を始める必要があるとともに、学校施設の質的なもの・防災の強化などハード的なものを含め、ソフト面・ハード面両方を重視していくことを検討する必要があると考える。
- ・大きなスケジュールとしては、本日、大きな方向性について皆様からご意見をいただき、その方向性に従って、次回の総合教育会議で素案を提出させていただき、そこでのご意見を踏まえ、来年度第1回目の会議において最終案を提示し、さらにその議論を踏まえて大綱を作成するといった流れを考えている。

(加藤部長)

- ・続いて、県立美術館の検討状況について、田中理事監に説明をお願いします。

(田中理事監兼博物館長)

- ・まず1つ目、この7月に整備基本計画を策定したので、その内容を簡単に説明させていただく。
- ・コンセプトや事業展開の特色、あるいはその整備の概要といった点は、前回ご説明した内容から特に変わっていない。一番下、整備運営と手法等について、PFI手法（BTO方式）とあるが、PFI手法とは民間の活力を活用して、まずは民間に整備していただくもので、その中でもBTO方式とは、民間による施設整備の後、県に所有権を移管し、また民間に運営していただくといったもので、これにより整備・運営して参ろうといった内容である。
- ・ただし、美術館という施設の性格上、役割分担ということで、学芸部門においては、美術作品の収集・保存・調査・研究・展示等の主要な部分は、引き続き県の学芸員が管理・対応し、そこに民間活力も入れ、充実を図っていこうと考えている。
- ・整備計画と並行して、県民の方々に関心を持っていただく、あるいは学校教育との連携など、様々なソフト面の取組を進めて参ろうと考えており、まず1点目、美術を通じた学び、学校教育等へのアプローチということで、そこに示す3つの取組を進めている。また、自作教材の試行的な制作も進めようと思っており、また新採教員の研修の中で、こういった様々な美術の学びについての研修をしたところである。そして2点目、ミュージアムネットワークによる連携

として、県内美術系の美術館が何館かあるが、それらとの連携による様々な取組、そして3点目は、そこに掲げている4点の取組を現在様々な形で進めているところである。

- ・そして3頁では、今後どのように進めていくのか、スケジュール案という形で、簡単ではあるがお示ししている。この30年度、31年度は、PFI手法で整備・運営する事業者を選定するための手続きを進めるとともに、その下、想定する時期を書いているが、来年度末には事業者を決定し、それから設計・建設、そして36年度中の開館といった流れで進めようと考えている。
- ・整備基本計画の概要、それから具体的な内容については、別冊として資料を添付しているので、改めてご覧いただきたい。

(加藤部長)

- ・これより各委員から順に御意見を伺いたい。なお、本日欠席の石原委員から1枚もので意見書をいただいているので、ご確認いただけたらと思う。
- ・まず、横井委員からお願いします。

(横井委員)

- ・学力調査、ふるさと教育について、少しだけ所見を述べたい。まず、学力調査については、結果がまずかったというところがある訳で、読解力、表現力、思考力といったところの問題に対して対策を進めるという考えでいいと思う。
- ・うちの学校では、生徒のモチベーションをいかに高めるかということが一番大きな命題であり、モチベーションを上げていくためには何をすべきか、ということ日々考えている。モチベーションを高めるには、もちろん家庭のこともあるが、学校の観点で考えると、まずは学校生活の部分と授業の部分、それから授業に関係するいろいろなイベントといった形で整理できると思う。
- ・これまで行ってきた手当ては、どちらかというと先生を中心とした学校の授業に対するてこ入れやイベントの実施により、モチベーションを上げるよう取り組んできた。
- ・ところが本当は、生徒のモチベーションを上げていくためには、そういった部分だけではなく、もっと学校生活全般に渡る生徒自身の自主自立が尊重されているかどうかが一番大きな点で、そういったところはどちらかと言うと、中学校から色濃く集団教育の色合いが強くなってしまい、そこに自主自立ということで、自分たちが考えたことが実現し、それが評価される世界というものは、なかなか学校の中にはないのではないかと思う。
- ・振り返って我が校の場合、自主自立という観点で、学校のあらゆる事柄に関して生徒が決定権を持っている。単純に決定権を持つだけではなく、当然責任が伴うことから、自分の考えを具体的なプランニングとして企画を立て、生徒・職員等に説明をして賛同者を募り、その賛同者が幾人か集まって初めて、それがひとつの意見として議論の遡上に上がってくる。
- ・皆で議論した上で方向性が定まれば、その方向性で進めていくといった取組を常にやってきており、子ども達が、普段の学校生活の中で、自主自立の考え方、精神を少しでも養ってくれていると思う。
- ・その結果、いま現在、どんどん外に出ていこうとしている生徒が多くなっており、「こんなことがあるよ」と言うと、すぐぱっと手を挙げる。この間も幼稚園からのボランティアの要望に対して、すぐに30人が手を挙げた。
- ・もうひとつ、学校の先生が授業に絡めて宿題等を出したり、夏休みの宿題があるが、生徒はだいたいやってこない。宿題をやってこないから、休み明けテストが何点以下の生徒には何月何日に残って勉強をやらせたが嫌がって誰もしない。
- ・効果が上がったかと言うと、ひとつも効果が上がっていない。明後日の水曜、職員会議で話すことになっているが、せっかく三者懇談など行っているのに、その子の学習面での課題、生活面の課題などいろいろあるため、夏休みに出す課題について本人に決めさせたらどうかという話をしようと思っている。
- ・保護者、生徒とともに一緒に分析し、その子が「これが自分の課題なんだ」と思ったら、その課題に対して「自分はどのような課題を考えるか？」と生徒自身に考えさせ、やらせようと思っている。

- ・では誰が管理するのかといった疑問が起こるが、いま結構便利になっており、スプレッドシートというものがある。書き込み式で、どんどん同時書き込みができて、1枚の紙に面談結果から各自の課題を書き込むことができる。
- ・それを担任が管理し、夏休み明けには「これどうだった？」と聞き、ICTも活用しながら、できたら自分の課題は自分で発見する。いま文科省では、課題を発見して課題を解決する能力を備えることが必要と言われており、全部先生から課題を決められるのはおかしいと思い、そういう話をしてみようかと思っている。そういうことで、学校の中での生徒達の自主性が少しでも育ってくればいいと思う。
- ・ふるさと教育については、多分、共感によるアプローチと体験によるアプローチ、イベントによるアプローチがあり、更にそこにイベントとしての講演みたいなものが入っているようだが、結局、それらが一体となって完結するような仕組みがないと皆バラバラな感じがする。
- ・講演だけ頑張っている市町村や学校があるかも知れないが、それだけではダメで、やはり講演や教科、体験型の学習からイベントまで、総合的に展開されて初めて身に付くものだと思う。
- ・あと、ふるさと教育はなるべく幼い時期に行ったほうがいいと思う。うちの学校も中学1・2年生で行っているが、先日知事にも見てもらったが、「カラフルラッキョウ」は中学2年生が考え出した製品で、実際に売れている。鳥取のラッキョウのことは非常に詳しく、ラッキョウ博士にもなっており、いつか鳥取に帰ることがあったら、ラッキョウで一旗上げるかも知れない。共感や体験、イベントや講演といった、先ほど言った4つのことを一体的に進めているため、生徒の記憶にちゃんと残っていくものと思って取り組んでいる。
- ・次期教育大綱について、ひとつだけ言わせてもらえば、是非、高等学校教育の今後の在り方も取り上げていただきたいと思う。
- ・特に高等学校のことで、折角全国で最少の人口の県であり、当然に高等学校の生徒数も最少であることから、ここでもし成功事例が生まれれば、全国に先駆けて「すごいことができた！」という話になる。
- ・そのためにも、人数が減ったため学級を減らし、学級が減ったため今度は学校を減らすといった考え方ではなく、学級の定数40人を35人、35人を30人にしてでも、いま求められている21世紀型のスキルが身に付くような、鳥取県らしい教育をやることができれば、必ずそれは評価を受けるはずであり、それを全国に発信していけると思う。
- ・「お金の問題がある」と教育委員会の方はおっしゃると思うが、できれば何か特区のような取組はできないものだろうか。例えば、1市町村でもいい、あるいは1学校でもいいので、教育特区のようなもので、本当に30人学級で21世紀型のスキルを磨くような、新しい学習指導要領に則った高等学校の在り方を実験的にできないか。そんなことを思っているのも、是非、次期大綱では高等学校のところもしっかりと協議していただければと思う。

(加藤部長)

- ・続いて、長曾委員にお願いします。

(長曾委員)

- ・先ほどの横井委員の話とも少し重なるが、特に夏休みを終えて感じるのが、家庭学習の在り方、宿題の出し方について。以前の会議でも話したと思うが、総じて量が多すぎる印象で、自分達が中高生の頃と比較すると、全体的に宿題が随分増えたと感じている。
- ・その宿題が生徒にとって本当に力が付くような出し方になっているのかといった点については、やはり見直す必要があるように思う。学校による量のばらつきもあり、米子市内の中学の場合、中学3年生にはあまり宿題を出さず、自分達で入試の勉強をしなさい、という学校もあれば、基礎から応用まで、すべて冊子を用意して全部やってこいという学校もある。
- ・大量の宿題を出す学校と少ない学校とではやはり生徒の取り組み方も違うほか、たくさん宿題があるからといって、それがそのまま身につくかと言えば、そうではない部分もある。どの学校の先生も考えて選ばれた課題だと思うが、やはり生徒の様子を見ると、疑問を感じるものがしばしばある。
- ・結局、答えを丸写しして終りにするという生徒が相当数居るということは、恐らく先生方にも暗黙の了解ではないかと思うが、外から見ていると、ちょっと意味がないのではと思うような宿題もたくさんある。生徒にとっては貴重な夏休みの時間を使う訳なので、難しいとは思いますが、

理想を言えば、やはり生徒の学力に応じて宿題の内容を変えていただけたらと思う。もちろん、さっき横井委員から話があったような、生徒それぞれに課題を決めさせることも、すごくいい発想だと思うが、公立の学校は生徒がたくさん居て大変なところがあると思う。

- 手づくりの宿題というのが一番いいと思うが、先生方も忙しいので、市販のものであっても、幾つかにレベルが分かれたものから自分で選べるようにするほか、または直近の期末テストの結果に応じて基礎問題とか、漢字練習のような単純なものをたくさんやらせる生徒を指名する。また、出来る・やる気がある子には、特別に難しい問題にチャレンジさせるなど、少なくとも今のような画一的、機械的にやらせるような方式ではなくて、少し幅を持たせることができれば、もう少し成果が上がるのではないかなと思う。
- 関連して、最近、生徒と接してよく感じるのだが、中高生が本当にいつ会っても疲れている。私は英会話の学校で働いており、出会うと最初にあいさつをする訳だが、「How are you?」と言うと、ほぼ全員「I am sleepy.」か「I am tired.」という話が毎日毎日、同じやり取りが続いている。
- もちろん私が接している生徒は学校に行った後だからということもあると思うが、学校に行き、更に塾にも来るという子なので、特に疲れているということはあるかもしれないが、中学生は、こんなに疲れていたかな? などと思うことが最近多い。話を聞くと、学校で課される課題が多い、部活が大変、宿題が負担といったほか、高校生の場合は、遠くから通ってくる子が多いので通学が負担といった声があるなど、様々な負担が多すぎて疲れ切っている場合が非常に多く、気になっている。
- 正直、こんな状態で勉強しても頭に入らないのではないかと疑問に感じることもあり、やはり、学力向上のためには、もちろん授業改善などの対策も必要だと思うが、そもそも根本的に生徒が健康的に学校生活を送れるような環境づくりも必要ではないかと思う。
- 部活の休養日を平日に設けても、結局その日には授業と塾がある。土日は練習試合などがあり、実質休日なしで毎日生活しているという生徒がまだまだたくさんいると思われるので、何とかして休日を確保し、もう少し学習に集中できる環境を整えるなどといった措置も必要かもしれない。
- ふるさと教育については、資料を拝見して、とても興味深いものがあるが、単純に面白そうな企画もあり、これは前回までの会議の議題にあった「県立高校の魅力化」の解決策にも通じるものと感じた。やはり、生徒にとって学校を魅力的にするには、体験型授業を取り入れ、教育内容を充実させることが必要だと思うので、このような取組を益々充実させていただきたい。
- 私はどうしても英語教育に結びつけてしまうが、英語授業の独自の取組としても、ふるさと教育と絡め、学校の魅力のひとつになり得ると思う。と言うのは、語学学校では割とクロスカリキュラムという教科横断的指導という手法が流行っており、私どもの学校で用意しているテキストでも、英語で算数の文章問題をつくる、地理や歴史について調べて話し合うなどの単元が取り入れられている。
- 生徒はすごく生き生きして、のりのりで面白い問題をつくってくれるが、このような取組が、あるいはふるさと教育についても出来るのではないかと思っており、体験型学習と英語授業とを融合させて、本当の言語授業の場を提供するといったことが出来るのではないかと思う。
- 例えば、以前、島根にブラジルから移住してくる方がすごく多いといったニュースを見たことがあるが、これから鳥取県にも、恐らく海外からの留学生はもちろん、移住してくる方を受け入れることも増えてくると思う。そのような海外の方と交流しながら、例えば英語を使った調理実習として、郷土の食材や料理について学び、英語を使いながら一緒に調理したり、または海外の方と一緒に農作業をする場合、どういう表現が使えるのか調べて実際に活動の中で使うなど、そういった試みができる機会がこれから出てくるのではないかと思う。
- 前回の会議で、知事から、英語教育を鳥取県のひとつの特徴にできないかという話があったので、実生活に即した表現法をふるさと教育を通して身につける機会が得られる、といった点があれば、私見ではあるが、鳥取県の独自色として打ち出していくこともできるのではないかと思う。

(加藤部長)

- 続いて、津島委員にお願いする。

(津島委員)

- ・私からは、家庭目線で見た家庭学習とふるさと教育について、少し話をさせていただきたい。
 - ・家庭学習について、学校から出された宿題以外の家庭学習のやり方を知らないといった子が、中学生ぐらいまででも、割と多いのではないかと思います。予習や復習は大事だということは保護者も子どもも頭では分かっており、また学習の時間をしっかり、出来るだけ取らないといけないうということも分かっているが、何をどうさせたらいいのか、どう指導したらいいのか、家庭ではよく分かっていない、といったところがあるのではないかと思います。
 - ・私自身も、どういうふうに言えばいいのかが分からない中で、「勉強しなさい」と言っても、「何故?」と返されたら、どう返したらいいか分からず、その辺りどうしたらいいのかと思っ
- ているところ。
- ・塾に行っている場合、塾でもある程度勉強時間のフォローはできるのかもしれないが、家庭によっては塾には行かせていないところもあり、家に帰ってしまえば家の責任で声かけをしないといけないうことになると思うので、そういった場合、どういうふうに何をさせるのか、どういうふうに声をかけたら効果的なのか、といったところを知りたい。
 - ・アンケート結果によると、勉強することが将来役に立つとは思っているが、普段の生活と関連づけられていないという結果も見えており、私自身が学生だった頃、とりあえず目の前にある問題を習ったとおりに解答するという意識で学習していたと自覚しているので、その辺りどこで、どういったシチュエーションで使っていけるのか関連づけて考えられれば、また違った見え方になっていたのかもしれないと思った。
 - ・ふるさと教育については、うちの自治体でも昨年、地域副読本が配られた。小学校3・4年生が対象で、どの程度活用されているか分からないが、自分の住んでいる地域を知り、愛着を持つことはすごくいいことだと思うが、反面、近年うちの町でもそうだが、アパートが増えて、よそから入ってくる方がとても多くなっており、そういう方が地域のことを知らないということが多いのではと思う。
 - ・うちの町でもそう感じるということは、例えば米子市や鳥取市など移住される方が多い地域では特にそうなのかなと思う。子ども会の活動でも、子どものいる家庭数は本当に少なくなってきており、手始めに地域と関わるような行事を考えても、人手が足りず出来ないケースが昔に比べて増えてきた。
 - ・こういった状況なので、逆に子ども達が学校で地域を学び、それを家庭に持ち帰って、保護者が子ども達から教えてもらうというような機会もあってもいいのかもしれない。親から子にアプローチすることは多いが、子どもから親にいろいろと教えてあげて、親が耳を傾けて親子の会話の糸口にしていけたらと思う。そういったことを学習していること事態、親も知らないといけないうと思うし、そこから親としても地域に愛着を持てるような工夫をしていけたらいいなと思う。

(加藤部長)

- ・続いて、上萬委員にお願いします。

(上萬委員)

- ・教育に携わる方と話す機会があったので、今日はその話をさせていただきたい。自分の同級生が鳥取市内に個人で塾を経営しており、そこに通っている子ども達の話聞く中で、今の子ども達の姿を聞いた訳だが、中学生は全員ネットにつながる環境下にある。
- ・その多くが機器が手元にあって、要は部屋に一人閉じこもって使うことができ、スマホだけではなく、そういったネット環境がゲーム機器の中に入っており、Wi-Fiで全部飛んでいるという話を聞いた。
- ・塾の先生が、休憩時間の子ども達の会話として、「今日帰って、お風呂入って、ご飯食べて、10時からオンラインで」といったことを聞くことが多いようで、こういった環境がもたらすものは、結局、時間をたくさん使ってしまう、つまり睡眠時間や学習時間を削って眠たい目をして次の日を迎えたり、宿題をしない、あるいは適当にこなして学校に行ってしまうといったことにつながっている。
- ・また塾の先生からは、宿題に関して、宿題を提出しないことが学校で通ってしまっているという話があった。私にも中学校3年生の息子がおり、鞆の中をこっそり覗くと折れたプリントが

出てきて、息子に「これ宿題だろ？」と聞くと、もやもやとしていて、「これは出さなくてもいいのか？」とさらに言うと、「いや、みんな出してないから」との返事。

- ・塾の先生に聞くと、いまは宿題を出さなくても、直接子ども達には罰がないとのこと。学校は立場上、罰することができない、こういうことを話していた。また、保護者も宿題あるいは毎日すべき課題など、家でする学習のことを分かってない方は本当に分かってないということを言っていた。これは東部のほんの一部の話かもしれないが。
- ・今回議題に上がっている全国学力・学習状況調査の解答の振り分けを、文科省のホームページで細かく見てみると、秋田県と鳥取県を比べた時、中学生の学習時間については、2時間以上学習している割合は、鳥取も秋田も変わらず31パーセントだったが、逆に30分以下しか机に向かっていない割合は、鳥取の子ども達が13パーセントなのに対し、秋田では4パーセントしかいなかった。この辺りの差が平均得点にそのままつながっているのではないかと思う。
- ・言葉は悪いかもかもしれないが、机に着けていない子ども達を、どうやって机に向かってもらうのか、この辺が鍵なのではないかと思う。
- ・家庭学習・宿題に関しては、少し乱暴な言い方になってしまうが、罰則的なもの、もちろん体罰はいけませんが、例えば居残って最後までやりましようとか、あるいは期日を指定して再提出してもらうように徹底するなど、毅然として子ども達にルールを伝えてあげるべきではないか。
- ・ルールを守る、最後までやり通す。スポーツにもつながってくるが、最後までやると力が付く。鳥取の子どもはそういう子であって欲しい。先生方も業務上大変忙しいと思うが、宿題を出す以上、最後まで責任を持ってやっていただきたい、といったことをその塾の先生とお話した。
- ・こうした現状を伝える場として、学校での保護者説明会にもう少し強制力があっていいのではという話もあった。例えば、学校説明会が年間3回ある場合、それぞれ内容を変えるのではなく、同じ内容を3回繰り返し、皆さんに必ずどこか1回は来てもらう。以前もちょっと言わせてもらったが、紙媒体は本当に弱いと思う。見て終りの一方通行になってしまうので、例えば学校での説明会で、一方通行ではなく議論、ディスカッション形式ですとか、Q&Aで保護者が何を聞いてもいいとか、本当に気軽に聞ける雰囲気をつくる。こんな会議にするべきだと思う。

(加藤部長)

- ・続いて、大羽委員にお願いします。

(大羽委員)

- ・今年の夏、私は鳥取県内と兵庫県内の幾つかの学校の研修に行き、算数の授業におけるユニバーサルデザインについて話をしてきた。また、夏休みの病院において、子どもがたくさん来るが、うちは学習相談窓口というのを設けており、脳神経小児科にかかっている子どもの中で、特に学習障害が疑われる子どもが親御さんと一緒に相談に来られる。そういうところで感じたことを、今回の議題にある「学力向上」ということで話をさせていただこうと思う。
- ・取組を拝見し、私は福岡県から来たので、鳥取県はとても教育にきめ細かく先生方が対応している県だなと思っており、それはこの度の学力調査のデータにも上がっていたと思う。
- ・例えば、資料別添1の3の2頁、質問項目のところ、「諦めずにいろいろ考えていますか」、「ノートに書いていますか」、「頑張っ諦めずに解答していますか」については、全国よりも良く、こういうところは今まですごく丁寧に、先生方に指導していただき、子ども達もその力が付いていると思う。
- ・もう平成も終るが、何となく昭和っぽい、一律の指導で終わっているようなところや、それから先ほどの話題にもあったように、子ども達の自己決定あるいは自己評価などが授業の中にどれくらい入っているのか少しクエストの部分がある。先生方自身が受けてきた教育というのが昭和・平成の教育なので、これからの教育というのを見据え、どう変えていくのかというイメージをどのように持つかと思うところも幾つかあった。
- ・そういう意味で、次の世代の子どもを育てていくために私達は何を変えて、何を維持していくべきなのかを考える、丁度いい時期に来ていると感じている。その中で、横井委員からあったように、もう少しモチベーションを上げるという点で考えると、やはりひとつは学校全体で取り組むというポジティブな関わり方が、もう少しできないかなと思う。
- ・先生方が子ども達を評価する時、やはり出来ていないところを挙げられるが、「ここが出来てないから困っています」とおっしゃるが、「子どもには、どうフィードバックしていますか」

と聞くと「ここができていないね」とおっしゃると言う。だから『先生方が、もし「ここまでできていますよ」というようなところもおっしゃるといかがですか』と先生方には提案させてもらっている。子ども達も「ここがダメ。ここがダメ。」で、80点を取っても「80点しか取れてない」といった子ども達の認識があると、どうしても「自分は頑張っている」という自己認識ができない。

- ・出来ていない子なりにも「ここまでできていますよ」というような評価の仕方をする事で、子ども達の自己評価、自分なりの評価ができて、自分なりに高まっていくのではないかと考えている。
- ・次世代の教育に向けて、子ども達が多様であるという観点が、今まで私達も逃げてしまって、それほど見えていなかったと思う。ひとつのやり方、ひとつの方法で、ついてこれない人はちょっと違うのかなというくらいの感じ方だったが、いま、教室の中にはいろいろな子どもがいて当たり前という時代の中で、皆と同じベースになる部分と、そこから少しずつ違っていく部分に対して、ある程度対応できるような授業の仕組みというものを考えていくといいのではないかな。
- ・そういう意味では、この度立ち上げるプロジェクトチームの先生方は、特に秋田県等の取組をご存じの先生は、そういった情報も非常にお持ちだと思う。秋田県の取組がいいなと思うのは、学習のガイダンスをきちんとされているという点。子ども達に、学び方を学ばせているという感じがする。宿題の仕方や勉強の仕方を割と丁寧に教えており、先生が教えるというよりも、「皆に学び方を教えるから、自分でやっごらん」といった姿勢を非常に重要視されているような気がしている。
- ・先生が一生懸命頑張るのではなく、やはり子ども達の力をしっかり使いながら、子ども達自身も教室の中で思いきり自分達の力を発揮できる場があると、それこそ、「僕はこんなところで役に立てた」という楽しみができるのではないかなと思う。
- ・宿題のことが少し話題に登っていたが、やはり学習相談窓口では、お母さん達は宿題のこと非常に悩まれている。これだけ力の差ができてしまうと、おうちで自分一人で楽々やれる課題を子どもに選ばせるといった形態の宿題にしないと、自分からはしないと。「お母さんと一緒に2時間ぐらい格闘して毎日宿題しています」と言われると、それは親も子も疲れるよな、となる。
- ・私が行った学校で、素敵だなと思った先生は、一年生にファイルを渡して、一人ずつ違うプリントを配っていた。概ね同じようだが、中には難しい問題は自分ではできないという子がいるので、見えないように配り、回収する時も見えないようにして回収して丸を付けてあげる。そうすると、子どもも宿題をちゃんと出来たという達成感を持つことで「ものすごく、これはいい取組ですよ」といった先生の実践があった。これは鳥取県内の先生です。やはり現場を回っていると、そういう先生方の素敵な実践がたくさんあるので、紹介のあったような授業づくりの冊子も、多分その先生方の実践の賜物ではないかなと思う。
- ・こういうものは、先生方と「こういうのがあるよね。うちはどうしているかな。」というふうに話し合う機会を是非持っていただき、先生方自身の実践が入るようになるといいなと思い、この素敵な取組の冊子を見せていただいたところ。

(加藤部長)

- ・続いて、教育委員の皆様の意見を伺う。まず鱸委員からお願いします。

(鱸委員)

- ・有識者委員の皆さんのおっしゃるところは、基本的には子ども達の取組に対するモチベーションや子ども達個々の多様性というものどう引き出すかといった点で、やはりいまの教育の在り方なんだと思う。
- ・その中に「ふるさと教育」という、私自身も非常にいいことだと思うのは、例えば、いま人口流出とか少子高齢というような中で、子ども達を鳥取に縛るとするのは、ふるさと教育ではないように私は思っている。子ども達が外へ出た時、鳥取県で育った自分のアイデンティティーを人に説明できる、その他の地方の方、あるいは他の企業の方と連携が取れるといったところに「ふるさと教育」というものがあるのだと思う。

- ・ふるさと教育というのは一口に言っても、小さい時から高校生・大学生という形でつながっているように思う。ですから、縦の糸を考えたふるさと教育、これをすべて、例えば英語教育にしても、すべてつながっている。人間の成熟というものを考えると全部つながっているように思う。
- ・有識者委員の皆さんが言われたように、やはりモチベーションというものがないと何もできない。この辺のところ、世の中が変わった、あるいは多様性がある等のことについて、教育に就いている専門職は気付かないといけない。やはり、物事が難しくなったら、そこに根を張らせていかないといいないと有識者委員がおっしゃったが、自分の経験を踏まえても、そういうふうにしたところ。
- ・大羽委員の言われたことに少し関連があるが、子どもの多様性の中で、みんなが違った認知の特性を持って生活している。その中で、グレーの子がいたり、本当に発達障害がある子がいたり、いろいろな子がひとつの教室にいる訳であり、最近聞く話では、子ども達が薬を飲んでいくケースが多いということ。
- ・大羽委員の場合は、大学と直接脳神経小児科の先生がよく連携されており、その問題の解決につながると思うが、現場を外から見ると、どうも医療モデルと教育モデル・生活モデルというものが、何かバラバラに動いているような気がする。
- ・学校の先生は、本来は教育モデルにおいて問題を考えて、子どもの多様性をどう取り上げていくのかということが大事だが、クラスがまとまらないから、どうしても「ちょっとこの子をお願いします」ということで医療につないで、医療は薬を出す。
- ・薬を出すと、その子どもの元気がなくなる・疲れる・しんどい、といった悪循環があるというのも、これは元気づくり総本部でも、あるいは子ども発達支援課など、薬と家庭・学校を結びつける調査をされたほうがいいのではと思う。

(加藤部長)

- ・続いて佐伯委員にお願いします。

(佐伯委員)

- ・私も全国学力・学習状況調査の結果等を見た時には、鳥取県の子ども達が少し受け身的で、地域の行事には参加しているが、自分から地域に関わっていこう、こう変えていこうといった気持ちをなかなか持っていないと感じた。
- ・新しい学習指導要領が求めている「学びに向かう力」という部分で、いま教育現場において、そういう力を身につけていくためにはどうしたらいいのか考える必要があると改めて感じている。
- ・この「学びに向かう力」をつけるためには、精神的なものとして、安心して学べる場がないと、そういった力を発揮しようという気にはなれないと思う。また、基礎的なものがきちんと身につけていないと、その学びが実現しないと思うので、両輪のようなものが要ると思う。
- ・そういった学習環境を整えながら、子どもに意欲を持たせるためにはどうしたらいいのか、といった議論をしていく必要があると改めて感じている。
- ・例えば、課題を見つけ、課題を解決した達成感が得られた。そこで、バタンと終わってしまい、次の学習に移る、ということになる訳だが、達成した後、次にどういった課題が出てくるのかを自分できちんと考えて、前の解決した方法を生かすのか、新たな方向でないかだめなのかと考えていけるような、やはりそういう子ども達を育てていきたいと思う。
- ・先ほどの読解力について、いま少し落ちてきたというのは、これまでの鳥取県では読書がすごく定着しており、どこの学校でも結構取り組んできた。この前も子ども達に司書の体験してもらって取組を図書館でやられたようで、司書の仕事に関心を持って応募してきた子どもが出てきたということも、その成果ではないかなと思っている。
- ・実は昨年度辺りから、少し基礎的な部分が落ちてきたことを受けて、学校には決められた時間しかない中で、基本的な計算や漢字を10分ずつ毎日やるといった練習の時間を取ったため、朝読書をどうしましょうか？ということになり、あえて朝読書を続けると決めた学校もあれば、朝読書は置いておいて、基本的な練習にシフトする学校もあったと思う。
- ・ここのところをぶれないで、いいと思って続けてきたことは続ける必要があったといま感じている。と言うのが、先ほども出てきたが、いま、どうしても子ども達はすぐスマホを手にする。タブレットもあり、いろんな環境もあって、なかなか活字をじっくりと目で追うという時間がつくれないという環境があるのではと思うが、朝学校に登校し、10分間でもシーンとした中

で自分が決めた本を黙って読んでみるという、その繰り返しの中で、何か培われてきたものがきつとあったと思う。さらに、その中で新しく知った言葉を使ってみたいと思い、自分の発見した言葉を使ってみる、表現してみる。そういう達成感もあったものと思っているので、この朝読書の実態を調べてみながら、子ども達にもそういった時間を保障できたらいいかと思う。

- 先ほども少し紹介があった算数・数学の授業づくりにおいて、年間3回はすべての学校に指導主事が出向いてくれるということで、その浸透をすごく期待している。これはやはり、やろうと思う先生は既に取り組んでいると思う。また、成果も上がっていると思うが、各学校の学年の縦のつながりと横のつながり、これがちゃんとしていかないと、点でやってもなかなか効果が上がらない。
- これまで鳥取県が行ってきたことは、間違っていなかったとは思いますが、縦や横のつながりが、やはり少し弱かったかなという反省点が上がってくると思っている。この部分で教育委員会から指導に入った時、それぞれの学校の実情を見ながら、学年を追っていきながら、横の学年団もきちんと同じように取り組んでいく。
- 先ほどの宿題の話で、宿題を出してもきちんと思わない、提出しなくても何ともない等といったことはあってはならないことで、それは当たり前のことだと思う。当たり前のことがきちんとして出来ないということがおかしい。
- 丁寧にやるべきことと、それから子どもの自主性に任せて自主性を育てていく。だから宿題もたくさん出して全部しなさいではなくて、必ずやらなければいけないことと、自分が選択してやれることを分けた方がいいと私は思っている。
- 先ほど話があったように、ガイダンスしてあげないと自主学習をどう進めていいのかわからない。ただ絵を描いたら終わりみたいに、内容を見ずに「よし」としてしていると、それで終わってしまうので、やはり自主学習としてはどういう内容がよくて、どうやってまとめたら効果があるのかということも教えてあげないといけない。
- しかし、決められた基本的なドリル的なものを絶対にやらないといけない、難しいことを必ずやらないといけない等と言っても、何時間もかかって出来ない子どももおり、誰でもできる簡単なものと、プラス何か自分で決めて自主的に取り組むことで、できるようになっていく。
- そういった経緯の中で課題が見つかり、僕は次はこの課題を調べてきますというような、そういうこともあっていいのかなと思っているところ。
- いままでやってきたことは間違っていないと思うが、もう少し丁寧に、かついまの子ども達に合ったやり方でやっていく。新しい学習指導要領で求めている方向性を求めていくということも、やはり続けていきたいと思う。

(加藤部長)

- 続いて、坂本委員にお願いします。

(坂本委員)

- ふるさと教育についてだが、何年も暮らしているが、周りの大人から「鳥取県には何もない」という言葉がまだ出る。子どもにふるさと教育をしようとする前に、大人の教育というか、大人が鳥取県の良さをきちんとは分かなければならないと通感する。
- その大人が知るの、地域のことは詳しいのだが、やはり鳥取県全体を知って、県外から来る方にきちんと話を聞かせたり、自慢話をするのが重要だと思う。例えば、知らなかったことがたくさんあるが、昔の伝統行事や食べものなど、NHKのアーカイブを見て初めて知ったというものもあるので、NHKのビデオとかを学校の授業などで先生と一緒に見るのはどうかと思う。
- 先生も多分知らないことがいっぱいあると思うので、こういったビデオ等により、ものすごく鳥取県の誇りを持つ授業ができるのではないかと思う。
- 以前、コナンの格好をされた知事がテレビに映っており、全国にコナンの状態で鳥取県をPRされた。また、農産物などもPRしてくださっており、これが本当にふるさと教育だと思う。
- 先日、コナン市でもコナンの格好をした、いつも赤い蝶ネクタイの市長がいるという話を聞いたが、鳥取県の影響が海外にまで渡っているなど、これはちょっと余談だが、思っている。
- ふるさと自慢というのは、最近はいろいろ、新聞やテレビ、ラジオでも、いろいろところで言う訳だが、若い人はあまり新聞やテレビ等を見ないで、ネットで自分の好きな情報しか集めないという状態にあり、やはり新聞やテレビを見る機会について、学校の先生は多分新聞を見

る時間もないのかもしれないが、そういった社会的なニュースをきちんと興味を持って見るといったことも必要ではないかと思う。

- ・砂丘にタモリが来るなど、鳥取県はますますぐ弾みが出ているので、県民はすごく鳥取県に対して愛着を持ち、自信を持ってきている。いま丁度この時期に、全国学力テストの順位争いをちょっと休まれるのはどうかと思っている。平均点すれすれのところで、あと1間できたらもう少し平均点が上がるよといった、そういう状態なので、全国の学力テストを少し休み、試験はきちんとやらないといけないが、鳥取県だけの独自の教育というものを見直してみてもどうかと思う。
- ・21世紀型特区ではないが、私がそういったことを言うのはいけないのかもしれないが、少し勇気を出して言わせてもらった。シミュレーションを行って、どれだけいいことがあるか、どれだけマイナス面もあるのかなど考えてみるいい機会ではないかと、ちょっと提案させていただいた。

(加藤部長)

- ・続いて、若原委員にお願いします。

(若原委員)

- ・全国学力・学習状況調査の結果について、ここ2～3年、全国平均を下回る傾向が続いているが、何も努力しないで下がっているのであればともかく、努力しているにも関わらず下がってきている。
- ・これは深刻な問題だと私自身は感じている。いったい秋田県や福井県とどこが違うのか。そういうふうに聞くと向こうの方は「うちは特別なことはしてません。普通のことをやっているだけです。」と答えられる。それでは常に平均を下回っている都道府県は普通のことかできないのか？といったことになる訳だが、決してそうではなく、やはり何か違ったことを努力されているのだろうと思っている。
- ・現場の先生方も、本気度であったり、あるいは意識がまだ十分じゃないなど、そういう精神論ではなくて、もう少し具体的な方法を提示していく必要があると思う。具体的には、プロジェクトチームをつくってこれから検討し、それを現場に浸透させていくことになると思うので、そういった取組に期待したいと思う。横井委員がおっしゃった、あるいはおっしゃらなかったことも含め、随分参考にさせていただけると思うが、一番基本的には生徒のモチベーションを高めること。別の言い方では、主体的な学習者を育てるとのことだと思うが、それも先ほどの話を聞くと、どれぐらい「How to」があるのではなく、普通の学校運営そのものに生徒が自主的、主体的に関わっていける仕組みがあり、そういう土壌や風土があって初めて、こういうモチベーションを高める教育につながり、効果を発揮できるんだろうと思う。
- ・そういった土壌づくりを、基本的なところにまで立ち返ってやらないといけないと思う。また、これは、後で時間があれば教えて欲しいのだが、横井委員のところでも校則というものがあると思うが、あればそれは誰がつくるのか。生徒なのか、あるいは学校だけでなく保護者とか地域の方と一緒に意見を出し合う、そういう議論ができる場所があるのかどうか。そういうことについて、時間があれば教えていただきたい。
- ・もうひとつは、ふるさと教育について。ふるさと、あるいは郷土というのは、子どもの年齢、成長とともに広がっていくものだと思う。空間的にも時間的にも段々広がっていく。いきなり最初からふるさと教育、鳥取教育と言っても、子どもにはいきなりは響きにくいと思う。
- ・身近なところから段々と近隣の町、そして私ですと鳥取県の中中部であったり、そしてやがて鳥取県全体に広がっていくものだと思う。ふるさと教育で大事なことは、子どもに「ふるさと」を意識する機会をどうやってつくってあげるか。
- ・今日の教育委員会でも少し話題になっていたが、子どもが他の地域、他地域の学校と交流するとか、あるいは外国と交流するなど、そういうことを通して自分のふるさとについて改めて関心を持てることもあると思う。そういう意味では、先ほどおっしゃった、ふるさと教育を英語教育と結びつけることも面白い試みではないかと感じた。

(加藤部長)

- ・続いて、中島教育長職務代行者にお願いします。

(中島教育長職務執行代理)

- ・全国学力・学習状況調査の結果について、皆さんからご指摘いただき、こちらからもお話しているとおり、長期的に右肩下がりの状況が続いているということに関して、県民の皆さんから

のご期待にお応えできていないという点において、県教委として率直に反省しなければいけないと思っている。

- もちろん、学力はこの点数に現れるものがすべてではないが、ちゃんと教えられているのかということに関して、ひとつの指標であることは間違いないので、それがすべてだとは言わないが、ここから見える限りは反省すべき点がたくさんあり、若原委員が先ほど申し上げたとおり、いままで様々な試みを重ねているにも関わらず、その成果が出ていないということは、やはり真摯に受け止めなければいけないことだと思う。
- いままでも申し上げたことがあるが、私達が県教委の立ち場で振る舞うときにどうしても難しいのが、我々がいろいろ県教委の中で議論した後、そのことをどうやって市町村教委との間で問題意識を共有し、具体的な方法に落とし込んでいけるのかというところが、やはりどうしても、もちろん東部・中部・西部の教育局があって接点をちゃんと持っているのだが、難しいところがある。
- 私はまずは、全国学力・学習状況調査については、対応策は二層かなと思っており、ひとつは、先ほど資料1の2で示した学力向上推進プロジェクトチームでしっかり議論していただくこと。これをなるべく早く、まずはここでもPDCAのPが行われる訳だが、ここでのPをなるべく早くDへ落としていくことが、一番重要なポイントではないのかと思っている。
- 今日教育委員会で議論したが、1回目が9月、2回目が10月で、次の3回目が1月・2月となっており、このサイクル自体ももっと早めるというぐらいのつもりで、現場でできること、すぐにでも解決できることを、なるべく早く拾い出して、よりしっかり現場での取組を高めていくことが私達に課された重要な使命であり、そのことについてしっかりとモニタリングしていかなければいけないと思っている。
- もうひとつの層が、皆さんからいろいろな形で言われている、「やる気」、「モチベーション」と言うか、やらされ感がないというところがすごく重要だと思う。
- 先ほど知事が大坂なおみさんのことをおっしゃったが、やはりどうしても私達は「日本が…」、あるいは「学校文化が…」など、ちょっとよく分からないが限定主義となってしまっている。
- 常に反省が求められる。どんなに頑張っても「何が足らなかった」ということを言わされて、「私は今日ここが足りなくてだめだったので、次は何々したいです」という形で任期を終らなければいけないようなところがあり、それが悪い訳ではないが、そういったことの積み重ねが、子ども達の自己高揚感というか、自尊感情というか、そういうものを十分に伸ばしきれてないところがあるのではと私は強く感じている。
- 恐らくこういうことを変えていくこと、学校文化とか教育システムを少し根本から変えることは、少し時間がかかることだと思うので、その辺のところは教育に関する大綱などで具体的にどのような方策をブレイクダウンしていくのか考えつつ、しかし大きな目標として自尊感情を高めていく。
- 自分の周りに自分の言葉で価値を見つけていくということが、自分に自分で価値を見つけ、それに対して言葉を与え、そして周りにも自分の言葉で価値を与えていく。東京目線で価値を与えるのではなく、自分の目線により価値を与えていくということを、どうやってひとりひとりの中に、それは大人も含め、埋め込んでいけるのかがとても大事であろうと思っている。
- これまで県教委で、「心とからだ生き生きキャンペーン」ということをやってきた。生活習慣をきちんとしましょうとか、そうすることで学力も上がりますよというようなことで、そこら辺も大事だが、自分や地域に誇りを持つというキャンペーンを何か考えて、鳥取県や自分の周りのいいところをどんどん発見していく、そういうマインドを醸成していくといったことができたらいいなと思っている。
- 要するに、ふるさと教育というものが、もちろん歴史を知ったりすることも大事であり、数値を知ること大事だが、それはあくまで自尊感情が軸になって、自分を中心としながら周りの良さを評価し、周りを誇り、自分を中心とした同心円上の中でふるさとの価値が発見され、いまの時代の中でそれぞれの人が周りの良さ、周りの価値を発信していく。それが当然他者への尊重への感覚にもつながっていくという形で、ふるさと教育が展開されることになるのがいいのではないかと思う。

- ・ふるさと教育においても、実は私の家の近所の小学校で実践したのだが、常にいまはインプットが先で、アウトプットが後になる訳だが、例えば小学校4年生を対象に行ったことは、東京の大学生に鳥取県の魅力を伝えるビデオをつくる、あるいは沖縄の人に鳥取県の交通事情について説明してみる、あるいは外国人に鳥取県のことを説明してみるといったように、誰かに何かを伝える具体的な「誰か」に向かって何かを伝えるという目標ができると、いろいろと調べるため、アウトプットの回路を先につくり、それに伴ってインプットさせるようなことをやっているとコミュニケーションがより豊かになるのではないかと思う。
- ・なので、国内の小学校とか、あるいは鳥取県にゆかりのある地域とつないでもいいのかもしれない。また、例えばバーモント州とつないでもいいかもしれない。鳥取県からいくつかモデル校と言うか、モデルケースと言うか、そういう実践の道筋をつけ、それを踏まえながらそれを展開させていくことで、自尊感情や地域の誇りも含め、同時に地域の発信もしていくといったことができると、自ずと思考力・判断力・表現力みたいな今日的な課題にもアクセスできるのでと、鳥取県の教育委員会の中で話をしているところ。
- ・とにかく、まずは現場での課題が何か。「できたらいいな」ではなく、やるべきことは「やるんだ」ということを、まずは現場に徹底をしてもらう。
- ・そして今回のプロジェクトチームは、そういう意味ではほぼ最強メンバーという形で組まれていると聞いている。このチームを最大限サポートしていきながら、結果が出るように、私ども県教委としては進めていきたいと思う。また同時に、いま申し上げた自尊というようなことについては、鳥取県全体のある種の学校文化を今日的なものに変えるといった長期的な課題についても、しっかり目標を持ちながら進めていかなければいけないと考えている。

(加藤部長)

- ・続いて、山本教育長にお願いします。

(山本教育長)

- ・いまの中島委員でだいたいまとめていただいたが、それぞれの有識者委員の方々からご提案いただき、どれも本当にそうだなと思いながら聞かせていただいた。
- ・特にすべての委員から宿題について、いろいろご提案・ご意見をいただいたが、こうしたこと、いま県教委でも、宿題・家庭学習の在り方について、そこにしぼった検討を進めているので、そうしたことを是非生かさせていただきたいと思う。
- ・宿題のやり方・家庭学習のやり方へのガイダンスなども、まだ足りてない部分があるといったお話もあった。そうしたことも含め、取組の強化であったり、出し方の工夫をいろいろとしていく。
- ・横井委員からは「自分の課題を自分で発見させる。提案させる。」といったご意見もあった。そうしたことも検討させていただきたいと思っている。
- ・ふるさと教育については、長曾委員から英語教育と絡めたということで、まさに我々も今日の教育委員会でそうしたことも含めて議論をしていたところなので、是非参考にさせていただきながら、このふるさと教育を、グローバル化も視野に入れた形で、鳥取県独自の取組ができればなと思ったところ。
- ・今日はとさせられたのは、大羽委員から、従来の教育システムを多様性に対応できるシステムにしていくべきだといったご提案があった。
- ・確かに、従来の教員がひとりで黒板をバックに、一律に授業をやっていた昭和の時代の教育を、いろいろな形で多様性に対応できるシステムとしてつくりあげていかなければならないと改めて感じたところであり、それにはICTを活用するといったようなこともあると思う。
- ・スポーツの世界でも、従来の動向や根性的な指導の方法から、いまモチベーションを高めるような、ひとりひとりに対応した指導方法に変っているといったようなこともある。是非、今日のご意見参考にさせていただいて、それを具体的にどう取り組んでいくのか、しっかり我々で検討させていただきたい。

(加藤部長)

- ・先ほど若原委員から横井委員に少し話を伺いたいという点があったので、横井委員にお願いします。

(横井委員)

- ・結論から言うと、校則はありません。まず第一期生が入った時に、高校生が学則・校則を決めた。その子達は、高校生には甘く、中学生には厳しい校則を決めた。それは自分達が中学生の間、

そのようにされたからだと言っていた。そういった学則・校則が一年目に出た訳だが、今度は二期生から「それはおかしいんじゃないか」という話が出て、二期生が「校則をもう一回考え直したい」と言い始め、いろいろ話をしていた。

- そのうち、私の校長室に意見書を書いて持ってきてくれた女の子がおり、「校則を全廃してゼロから考え直したい」という意見書だった。「では、その意見書を皆に諮り、賛同者を募ってやったらどうだ」という話をしたら、その子は確かにそのようにやってくれた。
- ただ大変苦勞があつて、その間、生徒同士の話し合いから、生徒への全体説明から、各クラスを回つての説明から、あるいは保護者にも説明しなければいけないので、全廃するための説明をしてくれた。その間、いろいろな意見が出るため、大変な思いをしながらそれを乗りきつて、その結果、最終的に3年目に学校全体で投票することになり、賛否両論もあり、保護者の意見や教員の意見もあったが、最終的には自分達が決めた「青翔開智中学生として、青翔開智高校生として決めた理想像」だけを描き、その理想像に向かうんだということで、全廃をすることになった。
- ただ注文を付けたことがひとつだけある。「校則は時代とともに変わるはずなので、必ず、どうやったら改訂できるか、改訂条項を付けてくれ」というのが、私の唯一のお願いで、ちゃんとそれを付けてくれて、今の形になっている。
- 問題が起きた場合どうするんだという話があるが、彼らに突きつけたところ、その時に彼らは「個人間のトラブルの場合、先生と相談しながら、直接自分達で解決するよう努力します。」と言った。更に「それで解決しない場合は、クラスの課題として前に出します。クラスで解決しない時は学年の課題とします。学年で解決できない場合は、中学校あるいは高等学校の課題として上に上げていきますから、そこで全廃をさせてください。」というふうには最後はまとまった訳で、今は校則はございません。

(加藤部長)

- 最後に知事にお願ひする。

(平井知事)

- 今日、皆様の話を聞き、共通項が見えてきたのかなと思ひながら伺つていた。今日のご意見を引き継がせていただき、教育委員会の委員の皆様と私ども執行部とで、また責任を持って話し合いをさせていただき、新しい方向性を考えていければと思う。
- 学力向上や大綱、またふるさと教育など、今日の話は大変参考になる話ばかりで、是非それを取り入れさせていただける、そのような気がする。教育委員の皆様も、ほぼ同種のことを言っていらっしゃったと思う。
- その上で何点かだけ、今後議論をさせていただきたいと思うのは、ひとつは横井委員がおっしゃった大綱の中で高校の在り方を考えるべきではないかという点。先ほど学級再編の話もあったが、今後、ここ数年で大きな流れが起きてくる。これを考える時期と今回の中期的な大綱の時期が重なり合うので、こうしたことも十分盛り込みながら、また次回、委員の皆様にご覧いただけるような内容をつくらないといけないと思う。
- また、学力向上推進プロジェクトチームが要になるという話が今日大分出た。中島代行の話のように、多分ベストメンバーなのだと思う。その上でこういうこともできるかなと若干思うのは、石原委員から意見書が出ているが、結構面白いことが書いてある。今日も、例えば、教育現場で実際に携わっている長曾委員から話があったが、ここに選ばれている方々は、県側は皆、組織のトップの方々で若干当て職的などところがあるが、こうした石原委員のような実務的な方をやはり交えたほうが、メンバーとしてはいいのかなと思うほか、また、学力向上などに一生懸命に取り組む時に、やはり首長の役割もあるのだろうと思う。
- 例えば、最近一生懸命学力向上に取り組み、奮闘しておられるような自治体の人にも入ってもらったほうが議論が活性化しやすいのではないかと。例えば日南町の増原さんなど。最近、預金を下ろしたりやっているが、ああいう方を少し取り込んだほうが、少し議論が活性化するのではないかと思う。そういう視点で、教育界の方々だけでない方も、もう少し加えていただけてスタートしたほうが面白いことになるのではないかなと感じる。
- それから今日の話で、皆様が一番強調されていたのは、結局子ども達のやる気を引き出すこと、モチベーションのことにつけるのだろうと思う。確かに「なるほどなあ」と思うのは、宿題は、

丁度夏休みのため、そういった議論が多かったと思うが、宿題は多ければいいということでもない。また、発達の過程でいろいろと子どもの個性があり、そういったことに配慮しながら、課題を出すべきではないかという議論もあった。

- それはなぜかと言うと、実は達成させることが大事であり、それが自分の能力を一步一步向上させていくことになる訳で、それを画一的にやるのがいいのかどうかというと、本当は違うのではないかと、こういう議論が多く出ていた。その辺は、確かにそうかなと思う。
- これは別に宿題のことだけでなく、例えばこれから学力向上に向け、いろいろと教育メソッドの話もすると思うが、子ども達が本当に面白いなと思って引き込まれていく、そういうカリキュラムだったり、作り方というものがあると思う。
- 今回の大坂なおみ選手も、自分の勝負をゲーム的に取り上げることで、それで本人も段々モチベーションを高めていったということもあった。最近の現象としては、さっきのコナンの話もあったが、コナンであるとか鬼太郎であるとか、もっと子ども達が興味を持つように寄り添って、何か達成感を持ったり、興味を持ったりするような仕掛けが、やはり子どもの目線なりに何かあるような気がする。
- そういうモチベーションの作り方を、今日、折角そういったご意見も出たので、これからの学力向上やふるさと教育など、いろいろなジャンルで考えてみてはどうかと思うので、今後よく協議をさせていただければと思う。
- ふるさと教育も、何か別の時間をつくることではないのかもしれない。小学校3・4年ぐらいで副読本が配られたという話があったが、そういう時に市町村だったり県だったり、何か定番のテキストを参照しながら、体験活動したりすること自体が、多分、社会科の学習そのものになってくるのではないかと思う。既存のカリキュラムの中に上手に取り込めば、ふるさと教育はできるのだろうと思う。インターンシップのような形で中学や高校の、あまり後の方の学年ではないところでやってみるなど、そうしたことができるのではないだろうか。
- また、英語を取り混ぜながら、先ほど中島代行がおっしゃったように、外国の方に説明をするというようなプロジェクトを行ってみるなど、そういった形で何かひとつ、それだけではなく、いくつか複合させてやるような鳥取県としての工夫があっただけではないかなと思う。
- 現場に任せて、とにかくふるさと教育をやりなさいといったことをすると、皆それぞれにいいことをされるが、結局時間の使い方として何か無駄が出てしまうなどあれば、何か全県的にやってみるといったこともあるのかもしれない。
- 例えば、英語で自分の地域を説明しなさいといった課題で全県でコンテストをやるなど、そういうことで楽しみながら競い合い、ゲーム感覚でふるさとのことも分かってくる。そういった複合的な何か成果を上げるようなことがあると思う。
- まさに、星空教育はそうだと思う。夜天気の良い日は「今日は空を見ましょう」という課題を出し、それを全県で競い合ってもいい。また、そういったことで自然科学に対する興味を取り上げて、実は理科の学習だったり地学の学習など、実はそういうものになっている。そんなような上手なやり方をもっとやれば、忙しい子ども達にはならないのだろうと思う。是非そうしたことをこれからよく話し合いをさせていただきたいと思う。

(加藤部長)

- 以上で、第2回鳥取県総合教育会議を終了する。